

戦後75年の道新連載記事と室内昭三さん

石原 宏治*

北海道新聞の連載「昭和ヒトケタ世代の戦後75年」で特攻機の整備をしていた体験を取材、昨年8月21日に登場していただいた、札幌市清田区の室内昭三さんの訃報が届きました。名が示す通り昭和3年生まれ。92歳でした。

復員後は釧路臨港鉄道に就職。昭和40年代に社長命で、コココーラの配送を担う「幸楽輸送」(札幌)に転籍し、生まれ育った釧路市を離れました。札幌暮らし半世紀になっていましたが、「釧路愛」は、とても強くお持ちでした。昨年9月発行の釧路市立博物館の館報426号には、巻頭言で「やっぱり釧路は我がふるさと」を寄稿しています。

同居していた長男の秀一さん(68)に聞くと、亡くなる直前まで「釧路史をやらなきゃならんね」と、意欲的に関連書類を集めていたとのこと。まさに急逝でした。

室内さんとの出会いは、釧路市立博物館の学芸員、石川孝織さん(46)が仲立ちしてくださいました。戦後75年の長期連載はスタート時の8月のシリーズが一番大変でした。

実は戦後50年目の夏、当時、釧路支社報道部の若手記者だった私は夕刊「釧路・根室版」で読者の手記を基にした「私の戦争体験」を連載していました。紙面で募集したところ大量に届いた手紙から選りすぐりの30人を紹介しました。今回、その方々の再取材を試みましたが、亡くなっていたり認知症になってしまっていたり、探しきれなかったりして実現できませんでした。それだけ戦禍の記憶は遠くなり、体験者の話を聞くのは難しくなっているのだと実感しました。

そこで社内外の伝手を頼って、昭和ヒトケタ生まれで戦争体験を語れる方を探しました。室内さんには石川さんが手紙を出して下さっていたので、私が電話をすると二つ返事で取材を快諾してくれました。

新聞記者になって32年、道内外14回の異動を経験し、市井に生きる人たちから総理大臣までさまざまな人に取材して、釧路勤務も2回ある私にとっても、トップクラスの心に残るインタビューでした。

そのうえ連載後も、手紙や電話のやりとりがあり、ご自宅にも招きを受け、お付き合いをさせていただくというのは、そうあることではありません。戦後75年の連載をすることになった経緯に触れつつ、室内昭三さんという博識で洒脱、多趣味な人生の大先輩の記憶をたどります。

◇ ◇

戦後75年の節目の年、「自分なりに読者に関心を持ってもらえるような記事を書きたい」。こんな思いが頭をよぎっ

*北海道新聞社編集局くらし報道部長



写真1. 札幌市清田区の自宅で戦争体験を語る室内昭三さん。博識で多趣味、洒脱、こんな年のとり方をしたいなと思わせる方だった=2020年8月7日

たのは昨年7月に入ってからでした。

戦後75年ってことは、昭和だと95年か。昭和の最初の頃に生まれた方はもう90歳を超えている。戦後80年には、もう話は聞けないだろうなあ。「昭和ヒトケタ」と呼ばれる世代に話を聞くとしたら最後のチャンスかも。「昭和ヒトケタ」というワードも目を引くだろう。こんな思考回路で産み出したのが8月10日から21日にかけて連載した「昭和ヒトケタ世代の戦後75年」でした。

旧知の昭和史研究家、保阪正康さん(80)がインタビューを受けてくれたので、戦争体験世代の世代論を載せた上で展開するという形で、連載としての意義づけも担保できました。連載中、読者から戦争体験の手記を募集したところ、来るわ来るわ最終的には200人以上から、お便りをいただきました。驚きの大反響でした。「今、語っておかなければ」という思いが伝わってきました。

保阪さんから「戦争を夏の季語にしてはいけない」とアドバイスされたこともあり、2020年いっぱい「戦後75年」にこだわることにしました。手記の一部は昨年9月の続編で紹介しましたが、「昭和ヒトケタ世代」の冠を、より広



写真2. 92歳の室内昭三さんにインタビューして戦争体験を語っていただいた2020年8月21日の記事(上)と、室内さんの急逝を受けて取材記者との交流なども含めて書いた2021年1月25日の追悼記事(下)。いずれも「どうしん電子版」で詳細を読むことができます。
2021年北海道新聞社許諾 D2102-2108-00023389

い対象に広げるとともに、遠くなってしまった戦禍の記憶は戦争体験世代の子供世代、その孫世代、ひ孫世代に伝えていく必要を感じました。

そこで今の子は2人に1人が107歳以上生きるという趣旨で「人生100年時代」をキーワードに、政府もさまざまな施策を実行しているところに着目しました。これから100年、そう22世紀の世界を生きる子供たちにも、継承する方法はないか考える連載をしたい。そんな思いで昨年10月5日にスタートさせたのが、「人生100年時代語り継ぐ戦後75年」です。

昨年末まで4部構成で展開。昭和ヒトケタ世代の戦後75年と合わせると6シリーズ38回の長期連載となり、今年からは「人生100年時代 戦争を語り継ぐ」と改題して続いています。いずれも「どうしん電子版」で読むことができますので、興味を持たれた方はぜひ、読んでいただければ幸いです。



そこで室内昭三さんです。室内さんの戦地は台湾でした。まだ16歳でした。「自分と同年配の特攻隊員が出撃の際、

この世で最後に手を握るのは母親ではなく、そのとき初めて会った整備員の私なんです。なんとむごいことなのでしょうか」

「終戦後、部隊が自活するため食料調達係になったとき、調達先だった先住民の部族長夫妻には『うちの子にならないか』と言われるほど可愛がられました。どうして半年しか付き合のない異国の青年に、それほどの情けをかけてくれたのかと思うほどで…」

話がこの2点に及んだとき、室内さんがこみあげる涙に両手で顔を覆った姿が忘れられません。以下、戦争中の経験は、室内さんの語り口調で書きます。



旧制釧路中で最終学年を迎えた昭和19年春、学校の先生が父親のところに来ました。「飛行機エンジンの製造・整備要員を募集している」と。実はそのころ、自分は数学が異常に好きなことに気付いていたんです。仲間が花札をやっている、自分は数学の問題を解いている方が楽しかったのです。三男坊で数学ができるってことがリクルートの理由だったようです。

中学は繰り上げ卒業で、千葉の航空教育隊に入りました。全国から集められた250人が半年間、飛行機やエンジンのことを学びました。

そして「明日、九州に行く」と言われ、軍服を支給されました。その軍服が半袖、半ズボンでしたから、「こりゃあ、南方だな」と直感しました。汽車で小倉に着き、船に乗ってようやく「行き先はシンガポール」と告げられました。その船が魚雷を食らったんです。ほうほうの体で台湾の港に着いた途端に沈没。岸壁には死体がズラリと並べられていました。

シンガポール行きの船を待つ2回、軍装を整えて港まで行きましたが乗りませんでした。後で上官が「絶対に沈められるから、乗せないようにした」と教えてくれました。ここでも命拾いしました。

代わりに台湾の飛行場を転々として、沖縄を目指す特攻機の整備をさせられました。重い爆弾を積むため計器も弾よけの鉄板も外しました。着陸しないから離陸する能力だけ、ガソリンも片道ぎりぎり。給油担当は「かわいそうだ」としきりに言っていました。

終戦は東海岸の秘密飛行場で迎えました。とは言っても、すぐ日本には帰れません。200人が自活するため、役割分担しました。一番若手の私は役に立たず、食料調達係になりました。

先住民族の部族長夫妻に、「うちの子にならないか」と言われるほど可愛がってもらいました。1年後の昭和21年7月、引き揚げ船の順番が来たときは、米軍の撮影した釧路空襲の写真を見せられて、「釧路に帰ってもなにもないかもしれないぞ」と言われました。上官からも現地除隊を認

めると言われました。

それでも釧路の両親が心配だったので、「安否を確かめて、路頭に迷うようなことになったら、ご連絡します」と返答し、引き揚げることにしました。引き揚げ船のところまで夫妻が来てくれて、こっそりビール瓶を渡してくれました。中にはピーナツがびっしり入っていました。釧路まで何日かかるか分からないため、1日8粒と決めて食べました。

船の食事は粗末で少なかったもので、どれだけ助かったことか。和歌山の港まで9日間。さらに汽車を乗り継いで秋田の手前でなくなりましたが、瓶は捨てられず、大切に釧路まで持ち帰りました。

その村長夫妻にお礼を言いたくて15年後、ようやく台湾を再訪することができました。奥さんは亡くなっていましたが、村長とは会うことができました。涙が止まりませんでした。命を助けていただきました。



室内さんのインタビューは戦争体験に止まりませんでした。戦後のことは記事には書きませんでした。室内さんの人柄でしょうか、これまた周囲の人に恵まれ、ご本人も「楽しい人生だった」と振り返るような経験をされています。再び室内さんの語り口調でお伝えします。



18歳で復員して千歳町の実家を訪ねたら、両親は元気でした。親は食べさせてくれたけど、なにか働かなければなあと思っていただところに、臨港鉄道に就職する話が舞い込んできました。鉄道屋もおもしろいかと、腰掛けのつもりで入りました。

給料は安いけれど、居心地のいい社員170人くらいの会社でした。ユニークな人間が揃っていたのです。文化活動が盛ん。書道にレコード鑑賞、カメラ、琵琶、テニスクラブにも入りました。

駅の助役や駅長をやっていましたが労組の執行委員長になって、最後は21社が加盟していた私鉄総連北海道地方本部の執行委員長にもなりました。そうしたら昭和32年には周恩来首相の招きで中国の国慶節に招待され、日本人15人で2カ月間かけ、汽車ばかりで中国各地を回りました。

委員長を退任して入舟町の駅長をやっていたら、本社に

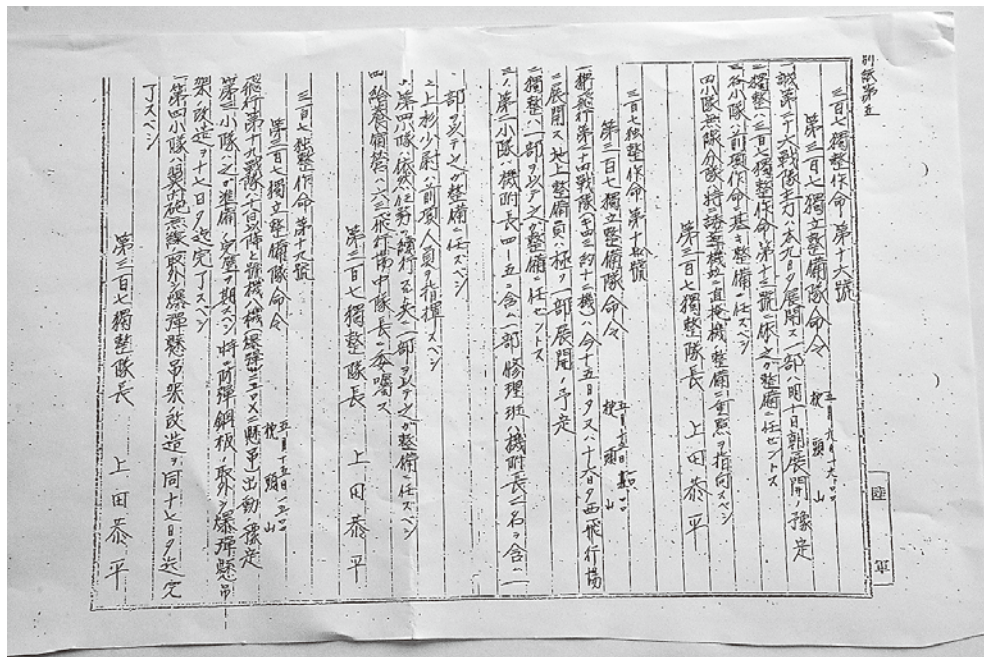


写真3.室内さんが保存していた特攻機整備の命令書。生還しないことを前提とした「十死零生」の作戦は、発動者となった司令長官すら「統率の外道（げどう）」と自嘲したもので、防弾鋼板を外す非情な指示がはっきりと記されている

連れて行かれました。毎週月曜に課長以上で朝飯会があって、思いついたことを発言するわけですよ。釧路港で入れるものがない倉庫が5棟あるという話を聞いていたので、私が倉庫業をやったらどうかと言ったら、社長が「おまえやれ」と。札幌の倉庫協会に行って仕組みを学び、いろんな会社を回って経営の知識を仕込みました。100件回ったら2件くらい当たるもんですよ。

アイデア出しては、「おまえやれ」の繰り返しで、辞令も一番多くもらっていたはずですよ。「取引先で、これからは油圧の時代」と聞いて、それも商売になりました。

コカコーラの工場ができることになって出資の関係で、コーラを配送する会社「幸楽輸送」に転籍しろということになりました。札幌営業所長から始まり、最後は専務でした。75歳まで働きました。

ガルウイングのトラックがあるでしょう。あれを日本で導入したのは私が最初だと思います。アメリカの雑誌を読んでいて見つけました。これはコーラのケースを積み卸しするにも重宝するぞと。昭和47年の札幌冬季五輪では、コカコーラが指定飲料だった関係で、月寒会場に派遣され、使いっ走りさせられました。戦争は何度も命拾いする体験もあって大変でしたが、そこでも人に恵まれましたし、戦後は本当に人生を楽しく過ごしてきました。



その後、筆まめな室内さんから手紙が来ては、私が電話したり自宅を訪ねたりするお付き合いになりました。

室内さんは「離陸技術さえあれば帰路分は不要と片道燃料だけ積み、防弾板まで外した飛行機に乗せられ、死地に

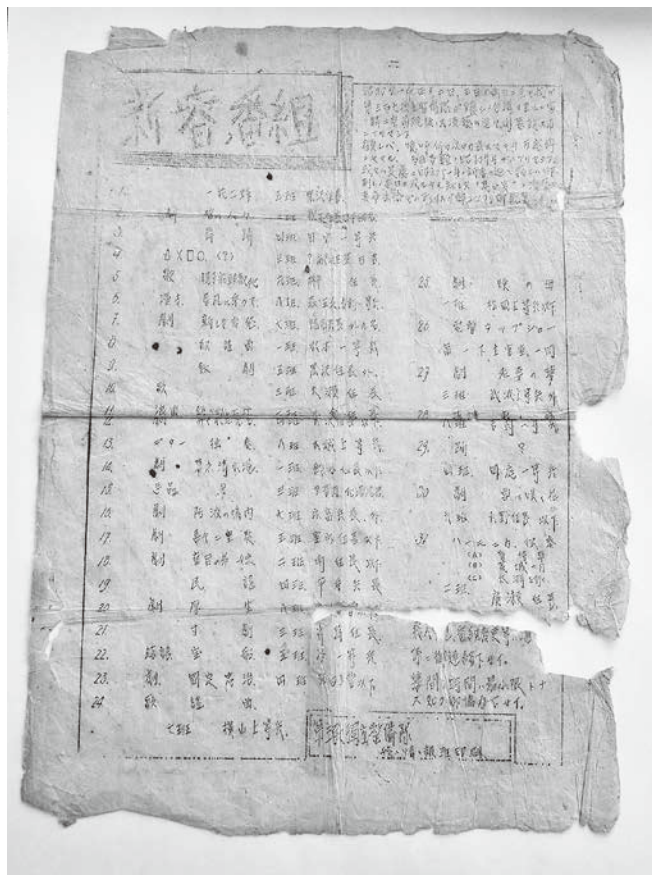


写真4. 室内さんのいた部隊は敗戦後、復員までの1年間、自活しなければならなかったが、暗いことばかりではなく正月には演芸大会で盛り上がった。そのプログラムが「なぜか手元に残っていたんだよね」と言っていた室内さん。自身「室内伍長」も劇の出演者として記載されていた

人間爆弾として飛んでいったなどと、どうしてご家族に言えましょう。だからずっと口をつぐんできました」と話していました。いただいた手紙に「貴兄に胸の内を十分話したので満足。今後、死ぬまで一切、当時を口にしないと決めました」とも書いてありました。人生の最後の最後に貴重な証言をしていただけました。

「昔の資料を処分し始めたらず特攻機材整備の命令書など、いろいろな資料が出てきました。なんでこんなものが私の手元にあるのか。機会を見てフラリと立ち寄ってください」と言われて室内さん宅を訪ねたこともありました。

そして室内さんの手元に残っていた命令書には、確かに「特に防弾鋼板の取り外し(中略)完了すべし」とあり、非情な作戦だったことがよく伝わってきました。敗戦後、引き揚げるまでの1年間、自活した部隊では娯楽のため催した演芸大会「プログラム」も残っていました。「室内伍長」も劇の出演者として出てきます。

他にも復員資料や戦中の写真雑誌本など、いわば室内コレクションが多数。室内さんから「うちにあっても私が死ねばただのごみ。もらってくれないか。扱いは任せる」と託されました。

室内さんは若い頃から多趣味で、釧路の春採湖畔の昆虫

を記録したり、第一線を退いてから水彩画教室に通ったり…。自宅を訪ねたときも切手コレクションなど、書斎にある多様な秘蔵品を見せていただきました。

室内さんが亡くなったのは、昨年12月17日。13日の早朝、「調子が悪い」と訴えるので救急車で病院に運んだところ重度の肺炎で入院、症状が悪化し4日後、帰らぬ人となったそうです。

長男の秀一さんは「連載記事を読み『へえ、そうだったんだ』ということがいくつもありました。父が台湾で終戦を迎えたことは知っていましたが、特攻機の見送りなど初耳でしたし。心に重荷を持ってきたことが分かりました」と振り返りました。

訃報を知らせてくれた石川さんが室内さんと知り合ったのは、2019年4月6日でした。石炭列車の廃止イベント「石炭列車さよならセレモニー・さよなら運行」の際です。石川さんは釧路臨港鉄道の会会員としてイベントに携わっていました。室内さんは遠路、札幌から参加。釧路市立博物館に臨港鉄道の切符一揃えや合図灯なども寄贈しています。

以来、文通を始めてやりとりは30往復に達していました。最後の手紙は昨年11月30日付けでした。その後、石川さんが出した年賀状の返信が、夫人からの寒中見舞いで、それは喪中の知らせを兼ねていたため急逝が分かりました。石川さんは「コロナ禍が落ち着いたら、札幌に話をうかがいに行こうと思っていたのに、心にぽっかり穴が開いたような気持ちです。一方で、道新に証言を残すことができ良かった」と悼む。

石川さんから聞いたエピソードで「室内さんらしいな」と思うものがありました。石川さんが2019年秋、釧路の話聞き取ろうと札幌の自宅に室内さんを訪ねた際のことです。途中でマチに行こうとなり、結局は「楽しい酒の席」で終わったそうです。茶目っ気たっぷり、楽しそうな室内さんの顔が思い浮かびます。

私に届いた最後の手紙は昨年11月22日付。札幌冬季五輪関連の印刷物や垂れ幕、記念パネルが出てきたことを記してありました。そして最後に

「ご来訪をお待ちしています。バイ」

洒脱ですてきな方らしい別れの言葉だったように感じています。

◇ ◇

先の大戦に関して報道機関がこぞって連載や特集に取り組む、次の節目は4年後の戦後80年、2025年になると思われます。肉声を聞ける体験者が鬼籍に入る年齢に達している中、従来の報道手法では難しくなるはずですが、ただ、北海道新聞くらし面では今年も来年も引き続き、戦争体験者の思い出を記事にしていきます。「今、語り残しておきたい」という思いのある方は、ぜひ手記を送ってください。お待ちしております。